

日本における洋鶏導入の歴史

誌名	鶏病研究会報
ISSN	0285709X
著者名	柿澤,亮三
発行元	
巻/号	31巻
掲載ページ	p. 13-21
発行年月	1995年9月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



日本における洋鶏導入の歴史
History of the Introduction of
Domestic Fowls into Japan

柿澤亮三

財団法人山階鳥類研究所, 〒270-11 千葉県我孫子市高野山 115

Ryozo KAKIZAWA

Yamashina Institute for Ornithology,
115 Konoyama, Abiko-shi, 270-11, Japan.

江戸時代後期の西洋鶏

古来からわが国で飼育されてきた地鶏^{じどり}、小国^{しょうこく}などの和鶏に対し、明治時代になって米
国、英国から輸入されたニワトリの品種を洋鶏と呼び、両者を区別している。それ以前の
江戸時代後期にも、オランダ船により西洋種らしきニワトリが日本にもたらされたが、そ
れらは蘭鶏、オランダ鶏（紅毛鶏）などと呼ばれ、物珍しさから明治時代になっても、か
なり広く飼育されていたようである。当時の絵図に描かれたオランダ鶏の図（1a・b, 2a・
b）を見ると、頭部に羽冠のあるものが多く、雌はポーランド種らしくも見えるが、今日の
品種とは明らかに異なる。したがって、それらの蘭鶏が遠くヨーロッパからもたらされた
ものなのか、あるいはバタビアなど南アジアからもたらされたものなのかは、疑問の残る
ところである。

江戸時代後期の鳥学書で佐藤成裕の著した『飼籠鳥』には、「一種蕃鶏と名つけて毎年阿
蘭陀人食用の為持来る。予先年長崎に在りて親しく是を見るに、乃ち、和の地鶏にして、
大小形色種々ありて、また和品と頗る異なる処あり珍し、蕃人西洋の諸国を経て求めたる
故、各々其の国の鶏にて最も珍玩すべき物なり、長陽の人は常の事にて更に意を留めずし
て顧みるものなし、日々食し終て又日本の鶏を求め帰る」と記載され、長崎に出入りする
オランダ船の航海時の食料として積みこまれたニワトリの総称を蕃鶏あるいは蘭鶏と呼ん
でいたことがわかる。

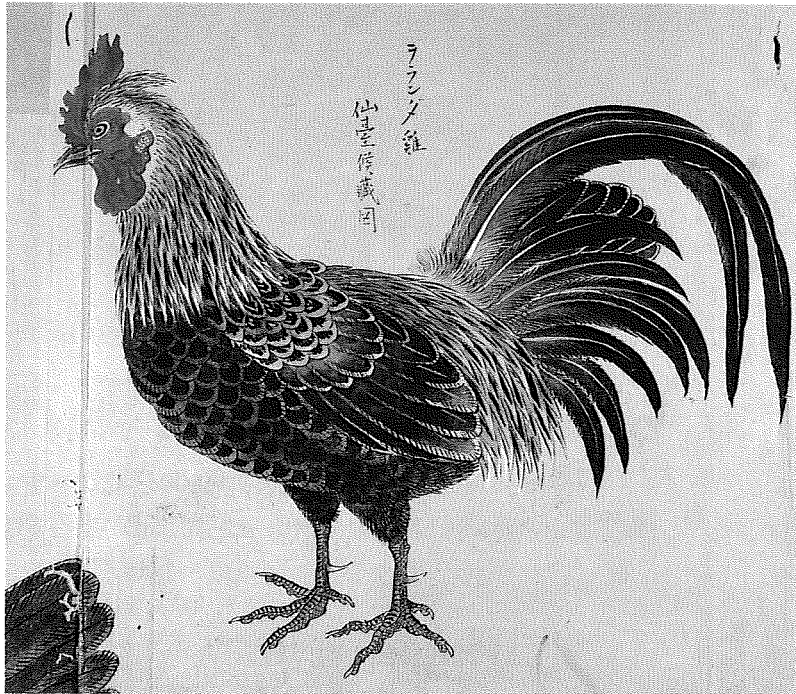


図 1. a 江戸時代の博物図譜「堀田禽譜」にあるオランダ鶏（雄）の図

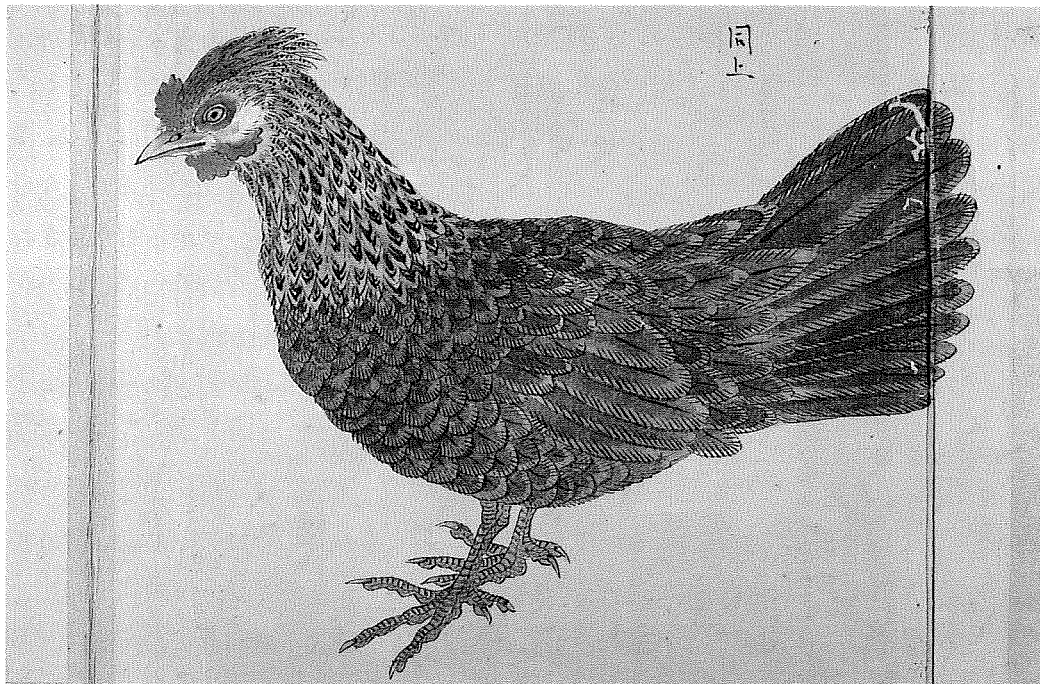


図 1. b 前図と対になったオランダ鶏（雌）の図



図 2. a 同じく「堀田禽譜」にある阿蘭陀鶏（雄）の図

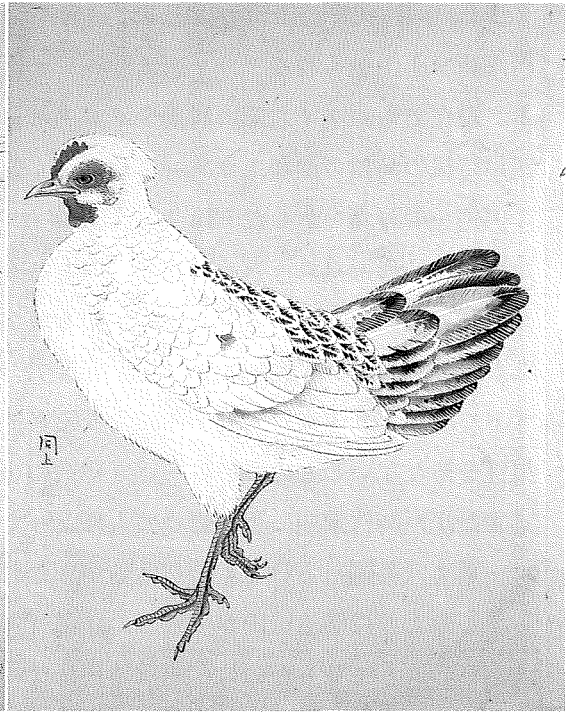


図 2. b 前図と対になった阿蘭陀鶏（雌）の図（1 a・b, 2 a・bともに宮城県図書館蔵）



図 3. a タイ北部で見られたニワトリ（雄）の頭部。図 1. a の頭部と似ている。



図 3. b 同じくタイ北部のニワトリ（雌）の頭部。羽冠をもつ点が 1 b, 2 b と類似する。

また、同時代の島津重豪による『鳥名便覧』には、「唐山ノ産ヲ和蘭陀船ニ載ルアリ、又西洋産ヲ唐山船ニ載ルアリテ唐蕃混同シテ原ノ出産ヲ弁シカタキモノアリ」と記されている。現在でも、タイ北部の村落やインドネシアのジャワ島の田園、あるいはアフリカでは江戸時代の禽譜の蘭鶏、オランダ鶏によく似たニワトリをごく普通に見かけるが、その中の何例かの写真を示した(3a・b)。したがって、江戸時代にオランダ船によってもたらされた蘭鶏は、一部はヨーロッパ産のものもあったろうが、その多くは南アジア産のニワトリだと考えられる。一部ヨーロッパ産のものがあったと考えられるのは、山本亡羊著『百品考』に西洋鶏、和名ランケイの項目があり、形態、羽色の特徴を述べた後に、「多ク卵ヲ生メドモ、アマリ巢入セヌモノナリ 人家好デ之ヲ畜フ」とある。これは産卵数が多く、就巢性を持たないことの多いヨーロッパ系のニワトリの特性をよく示しているからである。

また江戸時代末期に英国帰りの人によって上海からもたらされたといわれるニワトリにエーコク(英国)というものがあるが、これはコーチン、クキン(九斤)と同じものである。このように明治以前から若干の洋鶏(外国鶏)の導入はあったが、本格的に洋鶏が輸入されるようになったのは、明治時代になって外国との交通が頻繁となり、わが国の官民をあげて、西洋諸国の文化を吸収しようと努力するようになってからである。

多様な鶏種の輸入

明治の初年から20年頃にかけて、実にさまざまなニワトリの品種が主に米国から輸入された。どのような品種がどこから輸入されたかについては、『日本養鶏史』(木村和誠監修)に詳しく述べられている。その中から新しく輸入された鶏種(名称は当時のものを基本にした。括弧内は本書での表記)だけを年代順にあげると、以下のようである。

明治2,3年頃	黒色ポーランド 露国軍艦により函館へ
同3年	黒色コーチンらしき漆黒の大鶏 横浜へ
同4年	淡色ブラマ 米国より
同10年	黒色ミノルカ, 白面黒色スパニッシュ, バフ・コーチン
同12,13年頃	淡黄, 黒, 白の3種の大鶏が横浜の中国人居留地へ
同17年	ドーキング 米国より
同19年	横斑プリマス・ロック, 白色レグホーン, 褐色レグホーン, 銀色ワイアンドット, 銀色ハンバーグ(ハンブルグ), バフ・コーチン
同20年	アンダルシアン, 黒色レグホーン, 白色プリマス・ロック, 白色ワイアンドット, バフ・コーチン・バンタム(ペキン・バンタムのことと思

われる), 銀色セブライト・バンタム (シーブライト・バンタム), 金色セブライト・バンタム, ウーダン, 金色ポーリッシ (ポーランド), 銀色ポーリッシ, 白毛冠ポーリッシ

同21年 薔薇冠黒色バンタム, パートリッジ・コーチン, 黒色ランシャン, 薔薇冠褐色レグホーン, 暗色ブラマ

このように今では日本ではほとんど見るのできない多くの鶏種がこの時期にもたらされ, 盛んに増殖がはかられた。その結果, 数年後の「東京家禽雑誌」(明治 23 年 8 月号)の広告欄には, 各地の種鶏場から売り出されている種鶏, 種卵は次の鶏種にのぼっている。それらは,

ハンブルグ (金色, 銀色, 白色の 3 内種)

ワイアンドット (金色, 銀色, 白色の 3 内種)

レグホーン種 (白色, 褐色, 黒色, 薔薇冠白色, 薔薇冠褐色の 5 内種)

コーチン種 (バフ色, パートリッジの 2 内種)

ブラマ種 (淡色, 暗色の 2 内種)

ポーランド種 (金色, 銀色の 2 内種)

ランシャン種 (黒色, 白色の 2 内種)

プリマス・ロック種 (横斑内種と思われる)

レッドキャップ種, アンダルシアン種, ウーダン種, 黒色ミノルカ種, スペニッシュ種, クレベケール種, 銀灰色ドーキング種, 黒色ジャワ種, 黒色スマトラ種の 17 品種 (内種も含めると 29 品種・内種) である。

この時代は, 米国, 英国においてもニワトリの品種の改良, 品種の固定のほぼ終わった時期に当り, 新しい品種について盛んに研究されている最中であつた。図 4-a, b, 5-a, b に示したように 1850 年頃に導入されたコーチン, ブラマの 2 品種が, 1890 年には現在見られるような体系に品種改良されている。米国, 英国では 1850 年代からアジアやヨーロッパの各地からさまざまなタイプのニワトリを輸入し, その長所を在来の鶏種に移入させようとしたり, 輸入されたニワトリの長所を遺伝的に固定し, 品種を確立しようとする努力していた。したがって, この時期にわが国に導入された鶏種も, 性能の上から見ると, よい系統のものも改良途中の悪いものも混じって輸入されてきたものと考えられる。明治 24 年 6 月発行の「東京家禽雑誌」第 14 号の口絵には, 「シシリアン鶏」の図版が載っている (図 6)。この図の元は, 当時の米国の農業雑誌から再刻したとしているが, これは本書にも写真のあるシシリアン・バターカップ種の改良前の姿である。図を見ると, 当時米国にいた

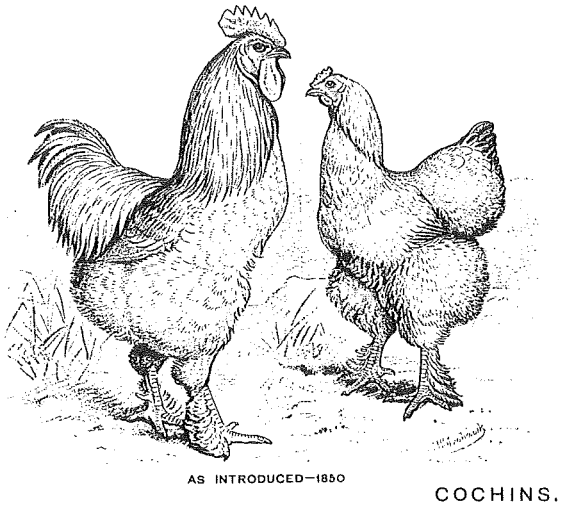


図 4. a 1850年, 英国に導入された時のコーチン雌・雄。

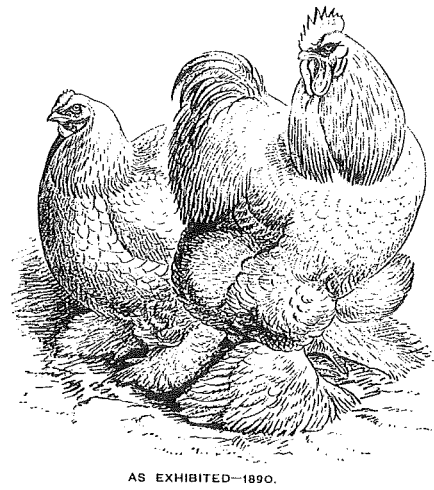


図 4. b 1890年, 品種改良後のコーチン雄・雌。

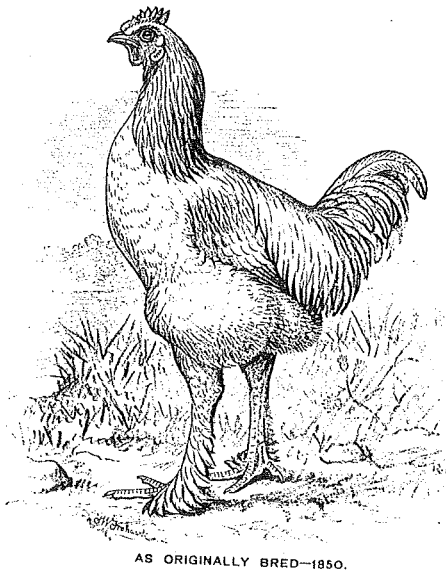


図 5. a 1850年, 米国に導入された時のブラマ雄。

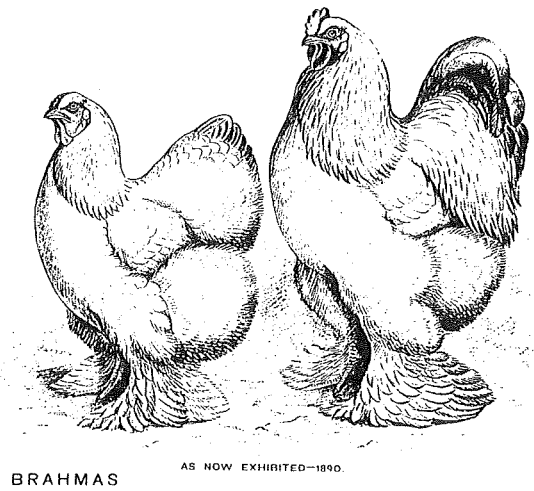


図 5. b 1890年, 品種改良後のブラマ雄・雌。

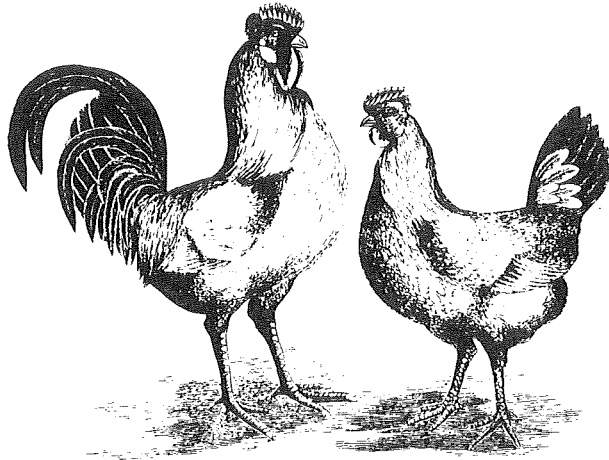


図 6. 東京家禽雑誌に掲載された「シシリアン鶏」

シシリアンは、肉冠は開いた二枚冠状を呈してはいるが、現在のものほど発達してはいないのわかる。また、この図では雌雄とも後頭部に羽冠を持っている点が、改良後の現在の品種と異なっている。因に、本品種が英国に初めて輸入されたのは、日本で紹介されたこの時よりも 20 年も後の 1912 年であった。

投機から衰退へ

さて、わが国に導入された鶏種は、明治 20 年代には当時最も品種改良の進んでいた米国から、ほとんど全てを輸入したかの感がある。これらの鶏種の輸入された当初は、白色の卵を産むレグホーンなどはすこぶる評判が悪かった。地方の人たちは、レグホーンは宵鳴きするといつて飼いたがらず、その鶏糞を与えた野菜を食べれば眼病になるとまでいわれたという（『日本養鶏史』）。したがって明治 21 年には、レグホーンの種卵は 1 個 5、6 銭でも買い手がなかなかつかず、親や雛に至ってはまったく買い手がつかないという状態であった。翌 22 年になると都会で洋鶏のことが注目され始め、親鳥の価格は番で 30 円の値をつけ、種卵も 1 個 25～30 銭と値が上がった。夏になると種卵の不足とも重なり、種卵は 1 個 80～90 銭となり、親鳥の方も 70～80 円となった。

輸入の羽数は、当初は品種ごとに雄 1 羽、雌 2 羽ずつを輸入することが多かった。それらの輸入鶏は大変高価なものなので、大切に育て、卵や雛を最大限生産するように努力した。その結果、洋鶏の羽数は増加したが、種禽の絶対数が少なかったため、増えた雛の中には遺伝的に劣化したものも多かったに違いない。それでも種鶏、種卵は飛ぶように売れたという。

この機に乗じて悪質な種鶏輸入業者も出てきた。最初に洋鶏を輸入した人たちは、性能の優れた洋鶏をわが国に導入し、畜産振興を図る希望を持っていた。これらの人たちはもっぱら米国の優れた養鶏家からニワトリを輸入していた。ところが、わが国での養鶏が高騰するきざしを見せるやいなや、一部の業者は米国で筋のよくないニワトリを安い価格で買いあさり、米国の優秀鶏というふれこみで盛んに日本へ送り出したという。明治22年7月発行の「日本家禽協会報告」第1号には、米国の家禽家ペーリー氏に日本へ輸出したニワトリに関する問い合わせをし、それに対して氏から来た返信を「米国家家禽ペーリー氏の書簡」として載せてある。

その手紙によると「御申越の義当地に於ても同様に、普通の食用鶏などを以て純粋種鶏と唱え売買を為するもの有。之是れか為拙者も尠からざる損害を被りたるを御座候」とあり、この後にペーリー氏がニワトリを輸出した日本人の名前があげられており、そのうちの1人の仲介者について次のように述べている。「同氏の周旋人は拙者の他に於ても最も不良種を購求して送付せし様見受け申候。毎々貴地へ向け積送る家禽を見分け致し候に、多く劣悪見るに絶えざるもの有。之是れ等は貴地の注文者か成る丈廉価にて購得する様当地の周旋人へ依頼するに拠るとならんと在候」

このような問題を含んだまま、明治22年に洋鶏飼育熱は頂点に達し、そして一気に洋鶏の価格は下落するのだ。明治23年6月発行の「東京家禽雑誌」第3号に「家禽家一盛一衰に喜憂する勿れ 宜しく奮起すべし」という記事があり、暴騰した種禽種卵の価格の部分を引用すると、「…暗色ブラーマ（ブラマ）、バフ、パートリッジコーチン、金、銀、白色ワイアンドット、単冠複冠白褐レックホールン（レグホーン）等の各種類最も重せられ壺番の代償其高きは参百円其の安きは四五拾円の間にして壺個の種卵参円五拾銭より其低価なるも壺円参四拾銭を下らざるの有様なりたるを以て苟も投機の志の有るものは不問に附し去るを得す…」とある。

本来、養鶏業とは、食用の卵、肉を供給するための職業である。このような外国輸入鶏を誰もが投機的な目的で買い求めるようなことがいつまでも続くはずがない。この時の鶏卵鶏肉の相場は、卵が大玉（約50g）1貫目（3.75kg）で82銭である。これは卸値ではあるが、1個の値段は1銭少しにしかならない。小さな卵なら1個1銭以下である。当時中国から輸入されていた上海卵はさらに安く、1貫目60銭くらいのものであった。市価の食用卵の値段と比べると、洋鶏の種卵の高価さには驚いてしまう。鶏卵にしても地鶏が1貫目60銭、中ビナの最上のもので1貫目1円であった。いったい一番300円の洋鶏の肉は1貫目いくらになるのだろうか。ここにいたって投機的洋鶏は失敗を見ることになる。

明治から大正にかけての養鶏は、この投機、暴騰、暴落の繰り返しであった。明治の中頃から大正にかけても相変わらず米国、英国から新しいニワトリが輸入されている。それらを列挙すると、アメリカン・ドミニーク、ラ・フレッシュ、胡桃冠プリマス・ロック、黒色オーピントン、薔薇冠ミノルカ、オールド・イングリッシュ・ゲーム、白色ドーキング、バフ・オーピントン、白色オーピントン、スパングルド・オーピントン、ペンシルド・ハンバーグ（ハンブルク）、パートリッジ・ワイアンドット、ロード・アイランド・レッド、スコッチ・グレー（スコッツ・グレー）、バフ・レグホーン、アンコナ、サルタン、インディアン・ゲーム、ブラマ・バンタム、ポーリッシュ（ポーランド）・バンタム、ラーケンフェルダー、ゲーム・バンタム、バクアイス、プリマス・ロック・バンタムなどである。この中にはロード・アイランド・レッドのように実用として導入したものもあるが、物珍しさから輸入されたものも多かったと考えられる。

このようにわが国には、実にさまざまな洋鶏の品種が導入された歴史があるが、残念ながら、現在それらのほとんどを見ることはできない。多くは家禽の教科書のなかで記されているだけである。しかしその中でも、白色レグホーン（ホワイト内種）、名古屋コーチン（バフ・コーチンと地鶏から作られた現在のナゴヤ種の原型）、横斑プリマス・ロックは広く飼育されてきたし、レグホーンの系統は現在の商業養鶏の大きな部分を依然として担っている。これほどまで多くの洋鶏が導入されたにもかかわらず、なぜ現在のように衰退してしまったかについては、個々の鶏種の性質、容貌などにかかわる問題ももちろんあるが、大きくは商業的に採算が合うか否かという篩にかけられてきた結果といえよう。（本稿は欧州家禽図鑑、平凡社に載せた拙稿に一部訂正、加筆したものである。）